

散文芸術の極致としての *David Copperfield*

— David の現実認識を中心に —

崎 村 耕 二

David Copperfield, the Height of Prose Art

— with Special Reference to David's Recognition of the Reality —

Koji SAKIMURA

人生の行路を幼少から青春へと歩んで行く David の足どりは、ある時は生き生きと無邪気に、またある時はおどおどとごちなく迎られる。そして、不幸な境遇に生まれた少年が、現実の前でしばし佇んでは一步を踏み出し、その罪のない一步が結局、現実の抵抗を呼んでつき返されることになる。—— そのありさまは、*David Copperfield* を形作る美しい散文となって織り上げられる。David は自らの歩みを踏みしめる。だが踏みしめた歩みの本当の意味合を知っているのは、実は成熟した語り手 David なのである。9才の時にこの作品を読み、あまりによく理解できたので、てっきりこの作品は子供によって書かれたものと思い込んだ George Orwell の感想はまことに卒直なものではあるけれども、幼少の無垢な行為の姿をこれほど鮮かに照らし出しているのは、子供ではなく成熟した David の透徹した眼力であり、この眼力は作者 Dickens の人間洞察によってしっかりと支えられているのである⁽¹⁾。成熟した David はもはや往時の少年 David ではない。彼にはもう何もかもが見えている。往時は涙にくもって見えなかったものが。彼は今や知りつくしている。愛情であると信じ込んでいたものが幻想であったことを。

大人にとっては、はっきり見えているものが、子供の目にはくもって見え、不思議な姿や不可解な姿として映ったりする。*David Copperfield* の場合、語り手は成熟した大人であり、語られるのは語り手自身の無知な幼少期である。そうして、この小説の成功は、語り手が、感情を極度に抑えて、遠い日の自分の無知な姿を描く時、それが無知というよりもむしろ無垢と言えほどの純粋性をわがものとしているところにある。

David の無知は、おもに、父親の死によってひき起こされた自分の不幸な境遇をはっきり認識し得ないこと、母親に対して不完全な認識しかなし得ないこと、社会へ出ていよいよ自力で進み始める段階にあって現実の実相を誤って解釈すること、そして最後に、恋愛において本当の愛情とうわついた熱情を区別できないこと——この四点に集約される⁽²⁾。

死は、子供の David の認識力ではどうしても理解できないものであった——

There is something to me, even now, in the reflection that he [David's father] never saw me: and something stranger yet in the shadowy remembrance that I have of my first childish associations with his white gravestone in the churchyard, and of the indefinable compassion I used to feel for it lying out alone there in the dark night, when our little parlour was warm and bright with fire and candle, and the doors of our house were——almost cruelly, it seemed: to me sometimes——bolted and locked against it. (2)

少年は、どうして自分の父親が、明るく温かな居間からひとり遠ざけられて暗い戸外でぼつねんと取り残されているのか訝しく思う。この疑念は、語り手の David 自身が、childish association と自嘲しているように、死に対する世慣れた認識が欠除しているところから生まれてきたのは明らかなことではあるが、同時に、未熟な認識力が精一杯働いた結果生まれた想像であるという意味では、全く純粹な疑念である。この純粹さは、大人となった現在の David からは strange という言葉で呼ばれるのであるが——そして、それは笑いを誘うような子供っぽさでもあるわけであるが——父の墓とこちら側の暖い居間を隔てる扉を残酷だと感ずる David の心情は、それが子供の小さな胸に宿った疑念であるだけにむしろ、死すべきものという人間の宿命に対する問いとしては、まじめな調子を帯びているとはいえないだろうか。子供っぽい連想がひき起こす滑稽味、そしてその連想が指し示す死という冷然たる現実の峻厳さ——この二つの要素は、統一した一つの表現となって哀愁をかもし出す。さらに言えば、この場合、死は、他ならぬ自分の父親の死なのである。父親の死に対する認識の限界は、同時に David 自身の宿命——つまり父無し子として生まれてきた自分自身の不幸な運命に対する認識の欠除でもある。したがって、子供じみた連想が、いかに子供特有の無知からきたものであっても、人はそれを嘲笑うことはない。無知はたしかに愚かしいものではある。しかし同時に、それが純一な表現を与えられた時、自分自身の身の上に対する認識の限界を忠実に語るものであり、この忠実さは、人に笑いをさそうというよりもむしろ、悲哀のこもった感銘をよぶ。

対照のために付け加えると、この長編小説を最後まで読み進めれば、後の場面で David が、自分の母親や、Barkis、あるいは最愛の妻 Dora の死に出会った時に死を耐え忍ぶ態度は、すでに幼児的な連想に見られる夢想の態度を脱していることに気づくであろう。David は、刻々と成長しているのであり、成長するということは、現実を次第に認識して行くことである。ただ、この小説全体を支配するものとして、現実を十分に認識している語り手という存在が仮定されているのであって、この語り手の完全とも言える認識によって、未熟な少年 David の刻々の現実認識の過程も照らし出されるのである。

“I have a Change” と題された章で、David が Peggotty と交わす会話は、少年の、死に対する未熟な認識を、語学的興味を添えて表現している。認識の未熟さは、時に、与えられたわづかな知識を拡大して解釈させるのである——

“My brother Joe was his | Ham's | father,” said Mr. Peggotty.

“Dead, Mr. Peggotty?” I hinted, after a respectful pause.

“Drowndead,” said Mr. Peggotty.

(32)

このやりとりで見られるように、Peggotty は、drowned という正しい語形を、無教養にも drown-ded と変形して使う。しかも、作者の配慮によって drowndead と表記されている。これは、David の心に印された drown-ded という耳なれない言葉の、少年独得の解釈を表わしているのである。Yarmouth に来て初めて海を見た David としては、海で溺死するという事は、具体的な実感を伴わない——というよりもむしろ、一種言い様のない、未知のものとして受け取られるわけであって、Peggotty の “Drowndead” という答えと、その語形の中に（作者によって）巧みに表象された David の反応は、一つの情景の中で一種謎めいた印象をかもし出している。Emily の一族をひとりひとり呑み込んで行った海、その驚異の力。幼い David には想像もつかぬほど強大な力を持ったものが現実にはあるのだ。それが死であり、その具体化が海であり、海で溺死することであった。だが、少年 David には、Peggotty がひと言 “Drown-ded” と言ってすぐに沈黙した時の、言葉にこめた実感

を共有するだけの経験が無い。David は、こうしてもう一度、Emily の父親について Peggotty に尋ねるのだが――

“Little Em'ly,” I said, glancing at her. “She is your daughter, isn't she, Mr. Peggotty?”

“No, sir. My brother-in-law, Tom, was *her* father.”

I couldn't help it. “—— Dead, Mr. Peggotty?” I hinted, after another respectful silence.

“Drowndead,” said Mr. Peggotty. (33)

David の質問のフォームは明らかに、溺死という漁師たちにとっては悲壮でいてしかも一種の諦念をさ感ぜさせる現実に対して、認識の限界を露呈している。(“—— Dead” の前部のダッシュは、Drowndead という初めて耳にする言葉に対して、少年がかろうじて認識できる部分、つまり「死んだ」ということと、認識が及ばない部分、つまり「溺れ死んだ」ということの区別を明らかにしてくれる。)⁽³⁾ この一見なにげなく描かれた会話は、ここだけでは単なる語学的な興味をそそるだけかもしれないが、小説全体の中での、他の部分との関連で再読するならば、きわめて意味深いものと言える。というのは、David がこれから歩んで行こうとする起伏に富んだ人生行路は、Micawber や Uriah Heep や Agnes といった人物達とのつき合い、あるいはまた Dover へのひとり旅や Dora との結婚といった有為転変によっていろどられるのだけれども、その様な、いわば人間同士の友愛や敵対によって生じる人生の風景は、Yarmouth の海によって象徴される、人間の力を越えた自然の威力への畏敬によって一つの大きな深みを与えられていると思われるからである。David が愛着をもっていた Barkis は、海の引潮とともにこの世を去る。それはあたかも海が Barkis を誘っているかのようである。又、Steerforth と Ham は、嵐の海で文字通り溺死する。そしてその時(第五十五章)こそ、David が本当に溺死ということをはっきりと、自分の身の上に関することとして認識する時である。そしてその時、David は、不完全な認識しかできない子供ではなく、十分に成長した大人として、Steerforth 夫人や Peggotty と同等の人格において、死の悲しみに耐えるのである。このように見てくれば、先にあげた David の認識の限界は、かえってその限界の純粹性ゆえに、成熟した大人の認識に見られぬ感銘を読者に呼び起こすと言える。つまり、さまざまな人生経験を経た大人が、他人の死に出会う時、それは、何かしら人生を支配している大きな力に対する諦念を伴わざるを得ないのであるが、他方、いまだ人生経験を経ない未熟な子供にとっては、与えられた現実にあふさわしい成熟した認識へはとどかないために、夢想や、奇妙な連想の余地を残すのである。そして、かえってその不十分さのために、成熟した認識を照らし出すのである。

次に、少年 David の認識の限界を示すものとして、少年の母親像があげられる。Mrs. Copperfield は、Miss Trotwood が呼んだ通り、wax-doll のような、無能な、それでいて純真な女性であった。そのことは読者の目には明らかであり、語り手の目にももちろん明らかである。しかし、語り手はその点について、決して明確な評言を加えず、母子という関係の中の少年 David の立場にあくまでとどまっている。それが母子の会話を類いなく美しくしているのである。第一章から第九章へと織り上げられる少年と母親の叙事詩は、純粋な子供の目によって、母親が、欠点だらけの無能な人間としてではなく、かけがえのない愛すべき母親として見られる有様を、美しい対話でいろどりながら結晶させている。しかも注意すべきことは、子供が母親に対して持つ認識の限界は、語り手(つまり成長した David 自身)によってはっきり意識されているということである。

夫に早く死なれた Mrs Copperfield は、やがて Murdstone とつき合い始める。ある日逢引きをして夜遅く帰って来た彼女を召使いの Miss Peggotty が遠まわしに咎める。とうとう二人は口論を始

めるのであるが、夫人は自分が不利になってくると、いかにも甘やかされた娘のように愚痴をこぼし始める。

"How can you be so aggravating ... as to talk in such an unjust manner ! How can you go on as if it was all settled and arranged, Peggotty, when I tell you over and over again, you cruel thing, that beyond the commonest civilities nothing has passed ! You talk of admiration. What am I to do ? If people are so silly as to indulge the sentiment, is it my fault ? What am I to do, I ask you ? Would you with me to shave my head and black my face, or disfigure myself with a burn, or a scald, or something of that sort ? I dare say you'd quite enjoy it." (20)

しかも彼女は、眠りから覚めたばかりの、事情を何も知らない少年に、

"Am I a naughty mama to you, Davy ? Am I a nasty, cruel, selfish, bad mama ? Say I am, my child ; say "yes," dear boy, and Peggotty will love you ; and Peggotty's love is a great deal better than mine, Davy. I don't love you at all, do I ?" (20)

と語りかけるのである。もとより少年は、母親の男女関係について知識を持っていない。そればかりか、母親の人格を母子の情をぬきにして判断することができない（これは当然のことである）。その子供に、いわば誘導尋問を試みる母親——ここには、この女性の人間的な無知があらわにされている。それと同時に、不幸な境遇（つまり人間的に成長しないうちに結婚し、しかも夫を早く亡くしたこと）から来る苦しい立場に耐えきれなくなった弱い女の姿が深い共感をもって表現されている⁽⁴⁾。この共感はどこから来るのか。それは、母親の姿を正確に判断し得ない少年を当然のものとして描きながらも、その少年の認識の限界を同時にはっきり示すことによって（例えば David は、母親の誘導尋問にのせられて Miss Peggotty を "Beast!" と呼んでしまうのだが、現在の語り手の口調には後悔の念がこもっている）、母親と少年の複雑な境遇を、あるがままの姿で浮き上がらせているためである。このことは、凹凸の凹を描くことが同時に凸を描くことであるのと同断である。こうして、語り手が自分の母親を描くという難しい課題は、現在の語り手の不動の、完全とも言える洞察力を、過去の未熟な自分の姿の中に純粹に表象させることによって、見事に解決されている。その結果、きわめて透き通った印象が、この場面を支配しているのである。

もう一つ例をあげれば、David が Murdstone の馬に乗せられて Lowestoft へ遠出に行き、そこで三人の大人たちによって冗談の種にされる場面がある。"Bewitching Mrs. Copperfield's incumbrance" とか "Brooks of Sheffield" という言葉が自分のことを指しているのだと理解できない少年 David の姿は、その冗談の滑稽さと相俟ってあわれをさそうけれども、実は、そのあわれさは、それを描いている後年の David をという語り手の、主観を入れぬ純粹きわまりない観照によっていよいよ高められているのである。語り手は今や、何もかも知り尽している。かつては死角に隠れていた意味が彼には見えている。したがって、少年 David の姿を主観をまじえず書くことは、語り手にとっては、当時の David の立場に身を置きながら、同時に、意地悪な大人たちの性根へ鋭い眼光を向けることにもなる。語り手の透徹した眼光は、この場面を描く文章を貫いており、読者の心に言いようのない深い感銘を与える——

"And who's this shaver ?" said one of the gentleman, taking hold of me.

"That's Davy," returned Mr. Murdstone.

"Davy who?" said the gentleman. "Jones?"

"Copperfield," said Mr. Murdstone.

"What! Bewitching Mrs. Copperfield's incumbrance?" cried the gentleman. "The pretty little widow?"

"Quinion," said Mr. Murdstone, "take care, if you please. Somebody's sharp."

"Who is?" asked the gentleman, laughing.

I looked up, quickly; being curious to know.

"Only Brooks of Sheffield," said Mr. Murdstone.

I was quite relieved to find that it was only Brooks of Sheffield; for, at first, I really thought it was I. (23)

Mr. Quinion said he would ring the bell for some sherry in which to drink to Brooks. This he did; and when the wine came, he made me have a little, with a biscuit, and, before I drank it, stand up and say, "Confusion to Brooks of Sheffield!" The toast was received with great applause, and such hearty laughter that it made me laugh too; at which they laughed the more. In short, we quite enjoyed ourselves. (23)

(一番目の例では、語り手は、今や Brooks of Sheffield が自分であることを知っているはずなのに、当時の自分が、最初それが自分を指しているのではないかと不安だったのにそうでないことがわかってほっとした、ということ述べるだけにとどめている。二番目の例では、現在の語り手の心境は、悲哀と憤懣で一杯のはずなのだが、私たちは心から楽しんだ、と述べるにとどめている。)

三人の紳士たちと少年の間の懸隔は、母親と少年の間に交わされる会話へと持ち越されて、子供の認識の限界にいよいよあわれを添える。

"What was it they [the three gentlemen] said, Davy? Tell me again. I can't believe it."

"Bewitching—" I began.

My mother put her hands upon my lips to stop me.

"It was never bewitching," she said, laughing. "It never could have been bewitching, Davy. Now I know it wasn't!"

"Yes, it was. 'Bewitching Mrs. Copperfield,'" I repeated stoutly. "And, 'pretty.'"

"No, no, it was never pretty. Not pretty," interposed my mother, laying her fingers on my lips again.

"Yes it was. 'Pretty little widow.'"

"What foolish, impudent creatures!" cried my mother, laughing and covering her face. "What ridiculous men! An't they? Davy dear——"

"Well, Ma."

"Don't tell Peggotty; she might be angry with them. I am dreadfully angry with them myself; but I would rather Peggotty didn't know."

I promised, of course; and we kissed one another over and over again, and I soon fell fast asleep. (25)

しかしこの場面のあわれは、David だけでなく母親の方からも来ていることに私たちは気づく。

David は、言葉を、いわば音だけで記憶して単なる運搬者として働くだけである。少年は現実認識および言語認識が未熟だからである。少年にとっては意味のない言葉——もっと正確に言えば、意味が認識され得ない言葉が、上の会話では、母親の側で意味をとりもどすのである。しかも少年は、依然、無知の中にいる。(この会話のあとで David が「すぐにぐっすりと眠り込んでしまった」という叙述は意味深い。)そしてこの、大人と子供の間の決定的な懸隔は、語り手の透徹した眼光によって眺められる。その眼光は、その清浄さのために、母親の宿命的な性情と、彼女のもとで無垢な少年時代に悲しい運命をたどらねばならぬ David の不幸を、同時に一つの美しい場面として結晶させている。

少年 David の子供らしい無知は、例えば *Lowestoft* で、ある船乗りが、頭文字で SKYLARK と書き込んだシャツを着ているのを見て、てっきり、船にばかり乗っているので表札を出す表戸がなく、かわりに服の上に自分の名前を書いているのだらうと思い込み、「ひばりさん」と呼びかけるところにも見られるが、この種の子供っぽい連想は、子供の無知というものを、ほとんど無垢と同義に感じさせてしまう。この様な無垢な連想は、Dickens 自身の好んで使ういわゆる “fanciful as if” として、他の作品のいたるところに見られるものであるが、多くの場合、それは単なる修辭的な飾りとして使われることが少なくない⁽⁴⁾。しかし、*David Copperfield* の場合(特に少年期を描いた前半部)、すべてのことはあくまで子供の立場へ立ち返りながら叙述されて行く。したがって、子供っぽい連想は、たとえそれが、荒唐無稽な空想であっても、David の目によって眺められた世界——子供にとっては現実の世界——を、あくまで正当なものであると納得させる力を持つてくるのである。

成長するということは、現実認識を刻々わがものとして行くことであり、それは、別の言葉で言えば、夢想や子供っぽい連想を切り捨てて行くことでもあるわけだが、*David Copperfield* の様に回想の形をとって成長を叙述して行く場合では、現実に対する無知を正当なものとして描きながらも、無知から現実認識へ出会う過程に意味を持たせなければならない。「無知」は認識によって否定される。しかし「無知」は決して悪ではない。「無知」が真実に会う前、「無知」には存在の根拠がある。しかも Dickens は、その根拠を究極的に無垢というところにまで求めているように思われるのである(少なくとも *David Copperfield* の場合はそうである)。したがって、「無知」が新しく現実を認識した時、その無垢な要素は、無知の中にひそむ宿命性をも照らし出すのである。Mrs. Copperfield は、ついに再婚し、David は、彼をおとづれた新しい運命のことを知らされる。「あのね、お父さまがおできになったのですよ」——そう言う Mrs. Peggotty のささやきを聞いて少年は彼の無知にふさわしい無垢な連想をする (“something—— I don't know what, or how—— connected with the grave in the churchyard, and the raising of the dead, seemed to strike me like an unwholesome wind.” (42))。そして、新しい現実を自覚するまでに、一歩おいて、

“You have got a Pa! ... A new one,” said Peggotty.

“A new one?”

(42)

という風に、大人の言葉を鸚鵡返しにして聞きなおす過程を踏むのである。つまり、新しい現実はまだ、意味の不可解な言葉——それは決して辞書的な意味が理解されていないというわけではない——に出会うことによってその到来を知らされる。そしてなすすべを知らず少年はただ鸚鵡返しをするばかりなのである。この過程は否応なく、読者を David の心情へ引き寄せる。少年にとっては、言葉がまづその新奇な様相によって、現実の何ごとかを暗示する。現実そのものの理解はあとからやって来る。そしてその時こそ、以前の、言葉に対する不十分な認識が立て直されるのであ

る⁽⁶⁾。「新しいパパ」という言葉にとまどった David が、その言葉に実際どういう意味を見出すか——それは “I fall into Disgrace” と題された章で明らかにされる。不幸な子供が、自分自身の悲しい境遇を自覚する過程は、母親の再婚と、その後の継父の迫害、虐待を描く第三・四章において、芸術的表現を与えられている。それは美しいほど悲しい場面である。

David の家庭における不幸な境遇は、Salem の学校へ旅立つことによって、変化を与えられる。学校は、母子家庭という頼りない環境にあった David にとっては、一種希望のきざしを持った外部社会の象徴である。家庭から社会へ——この移行は、少年が成長するための第一の条件であり、したがって、学校がたとえ限られた小さな世界ではあっても、やはり新しく経験され認識されるべき現実として、David には必要な課題である。

残酷な継父から折檻を受けて監禁された David のところへ Peggotty がやってきて、明日、ロンドンの近くの学校へ旅立つべきことを告げる (pp. 60-61)。この会話は、扉の鍵穴を通して交されるために、Peggotty の言葉は、途切れ途切れに、ささやきかけるように少年の耳へとどけられるということに注意したい。前に述べたように、社会という新しい現実に出会おうとする時、それは少年にとっては成長の一つの段階なのであるが、この場面の構成は、少年の限られた視野が、これから入って行こうとする社会を眺めること、あたかも鍵穴のむこうからの言葉を聞くかのごとくであることを暗示する。

そのことは、Peggotty が鍵穴のむこうから教えてくれた “Near London” という断片的な言葉をそのまま記憶して、後の場面で自分自身使ってみる場面においていよいよ明らかになる。馬車に乗って新しい学校へ赴く時、運送屋に、どの学校へ行くのかと尋ねられる。学校の名前を知らない David は、どのような答え方をするか。前後二つの場面からの引用を対照させてみよう。

“What is going to be done with me, Peggotty dear? Do you know?”

“School. *Near London*,” was Peggotty’s answer. (60)

... I asked the carrier if he was going all the way?

“All the way where?” inquired the carrier. (64)

“*Near London*,” I said.

“Near London” という言葉は、そのままそっくり Peggotty が教えてくれた言葉であり、それが少年の知っているすべてであった。少年は鍵の穴から聞いた言葉を通して、あたかも鍵の穴から見るようにして社会を見る。いわば、“Near London” という、目的地を漠然と示すだけの言葉——それは全く貧弱なてがかりにすぎない——をたよりに、社会へ旅立つのである。

ところが、その言葉が、社会の側から見ればどういう意味を持っているかは、さらに後の、旅館の場面で、給仕に「どの学校へ行くのか」と尋ねられて、先程と全く同じ答えを David がすると (“I said ‘Near London,’ which was all I knew.” [68]), それに対して給仕が、「それは気の毒だ、あそこは生徒を撲って骨を折らせる学校だから」という不吉な情報を提供することで、初めて明らかにされる。これは少年にとっては意外なことであった。Blunderstone から Salem の学校へ向かう途上で出会った運送屋と給仕の言葉は、David にとっては世間の現実から送られてくる一種の信号であり、それに対する少年の当惑・不安は、いよいよ第六章・第七章で展開される学校生活へ入る前の段階ですでに、はち切れんばかりにふくれ上がる。

さらに、旅館で昼食をとった時、David が給仕人の口車に乗せられて食事を横取りされてしまう事件も注目に値する。David 自身がごちそうをすべて平らげたものと誤解した大人たちは、David を見てクスクス笑い出し、“Take care of that child ..., or he'll burst!”と言ったりして冗談の種にする。この時の大人たちの誤解はすなわち、David をこれから迎え入れようとする社会の、少年に対する無情な反応であって、これはやはり、疑いを知らぬ子供の純真さが通過しなければならぬ一つの試練なのである。これと関連して面白いことは、“Take care of that child, or he'll burst!”と類似の表現が、Salem の学校へ着いた後で、別の形で David に向けられることである。Mr. Murdstone に折檻されて、思わずその手に噛みついた David を社会はどのような子供とみなすか。彼は学校につくとすぐに“Take care of him. He bites”と書いた紙を背中に貼られるのである。無心な子供が虐待された時にとった行為、それはそれ自体避けられないものだったが、社会は決して素直に同情してはくれない。少年は、成長の過程で、社会の偏見に出会うことを回避できない。次の場面で、少年の無垢が、社会の無情とどのように出会うか、その過程は一種のペースとともに見事に表現されている——

“I beg your pardon, sir,” says I, “if you please, I'm looking for the dog.”

“Dog?” says he [Mr. Mell]. “What dog?”

“Isn't it a dog, sir?”

“Isn't what a dog?”

“That's to be taken care of, sir; that bites?”

“No, Copperfield,” says he, gravely, “that's not a dog. That's a boy. My instructions are, Copperfield, to put this placard on your back. I am sorry to make such a beginning with you, but I must do it.”

(78)

ブラカードに書かれた「噛みつく」という言葉が、犬について言われているのだと思い込んだ David の純真な反応、そして無邪気にその犬の所在を尋ねる無心さ。そしてそれが、犬ではなく、自分自身を指していることを知らされた時の落胆。この過程は、David の使う「犬」という言葉が、Mr. Mell との間答の中で刻々本当の意味——つまり David 自身——に近づいて行く有様を見事に表現している。言葉の真の意味に達した時、少年は、世の中の誤解と、自分がこの世間では何者として取り扱われるのかということを実感するのである⁽⁷⁾。

David の幼な心は、いわれのない不安を自らのうちにかきたてる。そのことは、まだ見ぬ学友たちの名前を見ただけで、自分を迫害するのではないかという予感を持ったりすることに見られる

There was an old door in this playground, on which the boys had a custom of carving their names. It was completely covered with such inscriptions. In my dread of the end of the vacation and their coming back, I could not read a boy's name, without inquiring in what tone and with what emphasis *he* would read, “Take care of him. He bites.” There was one boy—— a certain J. Steerforth—— who cut his name very deep and very often, who I conceived, would read it in a rather strong voice, and afterwards pull my hair. There was another boy, one Tommy Traddles, who I dreaded would make game of it, and pretend to be dreadfully frightened of me. (79)

ところが現実には、それは紀憂だということが、後になってわかる。ここでも David が、途方も

ない空想の後で現実の真の姿を知らされることによって、以前、自分が言葉に勝手に付与していた意味（つまり人の名前を先入観で判断した結果、真実を見ないうちに拵えあげた意味）が訂正されることになり、このことが David にとって良い教訓となる。

言葉に関する教訓は、また別の形で与えられる。言葉は、ある意味では、現実の事物を表記するはずのものであるが、実際にはしばしば、現実とはくい違った表示をする場合があり、これが私たちを惑わせる大きな原因となる。特に子供の場合は、現実の経験が少ないために、言葉が先に与えられて、現実の後からやって来る場合が多い。したがって、現実の実感を伴わずまた想像の余地も与えないような言葉に新たに会った時の当惑は、子供らしい途轍もない空想によってますますふくらんで行くのである。しかし十分成長した大人にもこの傾向がないわけではない。現実と言語表現のギャップを、すばらしく滑稽な姿で体現した人物が Mr. Micawber であり、David がこの人物に出会うということ自体、現実認識と言語認識の関係についての知恵を身につけることを彼にうながしているのである。ここに到って少年 David は、成長への第一歩を踏み始める。つまり、Murdstone and Grinby の商会へ奉公にやらされた David は、そこで出会った Micawber 夫妻が、“Mrs. Micawber's Boarding Establishment for Young Ladies” という看板を出しているながら、夫人のところへは女生徒など来ている様子はないし、また実際、そんな準備さえしていないのに気づく。儉約を唱えながらも Mr. Micawber 自身はひどい浪費家であることにも少年ははっきり気づいている。つまり、社会へほうり出された David は、自分が持っていた認識——言語を通じた認識——を訂正して現実理解を立て直すという経験を経た後、今度は他の人物について、その言語上の見かけと現実の間の懸隔を見つける目を持ち始めるのである。

この目は同時に、Dickens の目でもある。そして、そういうものとして読む時、*David Copperfield* という作品は、言語と人間との関連について、深い洞察を読者に与えてくれる。Mr. Micawber のところへやって来た Captain Hopkins が、下院へ提出する請願書を朗々と読み上げる場面について David は、

I remember a certain luscious roll he gave to such phrases as “The people’s representatives in Parliament assembled”, “Your petitioners therefore humbly approach your honourable house,” “His gracious Majesty’s unfortunate subjects,” as if the words were something real in his mouth, and delicious to taste. (169)

という述懐に見られるように、鋭い観察を見せるのであるが、ここでは、個人の幸福が、社会改革による生活の向上によってどれほど達成されるかという Dickens の後年のテーマを、彼自身どのような形で文学的に表現しようとしていたかという問題が垣間見られる。意見の表明は（それが特に政治色の強いものであるほど）、現実的根拠にもとづいたものでなければならず、仮にそれが空虚な意見であるならば、何よりも、その空虚さは、言語的様相の中に表われ出るとは疑いない。意見は言語によって伝えられるのであり、しかも言語は、話者の内部に持っているものを、話者の好むと好まざるとにかかわらず、人の目にさらす。そういう意味で、言語は忠実なのである——Dickens の言語認識は、そこまで達しているように思われるのである⁽⁸⁾。“If anything turned up” というきまり文句は、Mr. Micawber にとって現実的根拠を持たないものであるが、彼は、言葉そのものに酔って、そのことで現実の苦痛を忘れ、元気を得ているように思われる。そのことは、Captain Hopkins も同様である。個人の幸福は、社会改革によってもたらされる福利と重なる面があることは、Dickens 自身認めていることは確かだが、同時に彼は、両者の混同が、請願書を「甘ったるい巻き舌で」読み上げる人物の言語的虚飾という形で表われていることを見逃さないのでは

る。

David の少年期の成長は、Dover の伯母のところへ訪ねて行くことによって、一つの大きなくぎりを与えられる。そして少年の、子供らしい現実認識の過程が描かれた美しい叙事詩は、一応第十三章あたりで終わりを告げる、ということは、認めてよいと思われる。しかし、これ以後、幾重にも織り込まれたサブ・プロットの間に顔を見せる成長した David にとって、まだまだ道のりは遠かである。この小説の後半で、David に課せられた大きな課題は、恋愛から結婚へいたる青年のうわついた情熱のまどわしに足をすくわれながらも、ついに真の愛情を認識する、という困難な問題である。

Dora との結婚の意志を伯母に打ち開けた David は、彼女から否定的な言葉を聞かされる。David の恋は盲目的な恋であって、そのことは、自分の恋情にいささかも疑いを入れない自己過信の態度に表われる。次に引用する青年 David と伯母 Betsey Trowood の会話は、長い人生経験を経て、しかも自分自身不幸な結婚をした中年の婦人と、いまだ情熱と愛情の区別ができない青年の間の懸隔を、言葉のやりとりの中に、みごとに浮き上がらせている。

"... we love one another truly, I am sure. If I thought Dora could ever love anybody else, or cease to love me ; or that I could ever love anybody else, or cease to love her ; I don't know what I should do — go out of my mind, I think !"

"Ah, Trot !" said my aunt, shaking her head, and smiling gravely, "blind, blind, blind !"

"Some one that I know, Trot," my aunt pursued, after a pause, "though of a very pliant disposition, has an earnestness of affection in him that reminds me of poor Baby. Earnestness is what that Somebody must look for, to sustain him and improve him, Trot. Deep, downright, faithful earnestness."
(504)

二人の間の、恋愛に対する態度は、この会話において決定的な相異を表している。しかもこの会話をきわめて印象的にしているのは、二人の間の懸隔が、まさにどうしようもなく埋められないものであることを、二人の言語表現の対照そのものによって語らせていることのうちにある。"you fancy yourself in love !" という伯母の言葉が、David にとっては何よりも意外だったのであり (David の "Fancy, aunt ! I exclaimed, as red as I could be. 'I adore her with my whole soul'" という反応を見よ)、この予想もつかなかった伯母の言葉を拒否することの中に、David の恋の盲目が表われている。しかし、彼の心には、この時、不安が雲のように訪れる ("... without knowing why, I felt a vague unhappy loss or want of something overshadow me like a cloud." [504])。そしてこの「雲」は、後年の David (つまり語り手) の目には、Dora との結婚・結婚生活の破綻・Dora の死——これらの時の流れの上に、不気味にかかっているのである。だがこの雲は、「今」となってしまうのではない。伯母の言葉には、人生経験から来る深い意味合がこめられている。そして、そういう意味合を持った言葉である以上、David の側で、それに値する人生経験が、知恵とともに、重ねられないかぎり、伯母の言葉は David の心にまでは入ってこない。そのこと自体、伯母はよくわかっている。だからこそ、"blind, blind, blind" というため息ともつかぬ言葉は、真剣な様子で、ほほえみながら、首を振り振り語られたのであった。David が "we love one another truly, I am sure" という風に、love という言葉を使っているのに対して、伯母は affection という言葉を使っていることにも注意したい。そしてこの種の語彙の落差は、後に Dora の父親が急死した結果、彼女の唯一の身内となった Miss Lavinia と Miss Clarissa のところへ、交際の相談に行った David が、この奇妙なオールドミスとの間で交わす会話の中にも見られる。Miss Lavinia の言葉を注意してたどって行けば、彼

女が恋愛の情について述べる時の言葉の選択はきわめて慎重なものであることがわかり、そのことは、David の語彙との対照によって明らかにすることができる。両者の言葉を、芝居の台詞風に書き改めてみよう。

Miss Lavinia : We have no reason to doubt, Mr. Copperfield, ... that you have an affection —— or are fully persuaded that you have an affection —— for our niece.

David : Nobody had ever *loved* anybody else as I loved Dora.

Miss Lavinia : We have no doubt that you think you like her very much.

David : Think, ma'am, oh! ...

若い者の抱きがちな盲目の恋への懐疑は、Miss Lavinia のもって回った言語表現の中に、なにげなく織り込まれている。そして彼女の慎重な言葉づかいは、“love” という言葉を乱発する David の表現と対照を成すわけであるが、この対照は言語の織り物としての文体に、一つの絵模様のように表現されているだけであって、作者 Dickens の意図は、David の過誤を指摘するだけでなく、青年が自分の過誤を認識し得ないことの中に盲目の愛の決定的な特徴があるということを示すことだったのではないか。そう考えてみれば “the light inclinations of very young people” や “the likings, or imaginary likings” という Miss Lavinia の表現にみられる語彙が、そのまま David の

I thought I perceived that Miss Lavinia would have uncommon satisfaction in superintending two young lovers, like Dora and me; ... This gave me courage to protest most vehemently that I loved Dora better than I could tell, or any one believe; that all my friends knew how I loved her; that my aunt, Agnes, Traddles, every one who knew me, knew how I loved her, and how earnest my love had made me. (597—598)

という熱に浮かされたような主張に、暗に警告を与えていることがわかる。ただし、この場合、語り手は、熱心に自分の愛情を表明する往時の David を静かに眺めている。それは、間接話法の形式で、love という言葉が、過去形をとっていることから来る。語り手は、往時の無邪気な恋愛を、ほほえみながらふりがえているわけである。しかし、彼の「愛」が実現し、結婚式の日を描く時の語り手は、もはや不動の立場を降りている。彼は、往時の David と一体になるのである。現在時制が語り手を支配し始める——

Yes! I am going to be married to Dora! Miss Lavinia and Miss Clarissa have given their consent; ... (627)

そして “Nothing is real” (629) という感慨は、一団現在の彼のものか、それとも過去ののものか、区別がつかない。それは、恋愛の圧倒的な力に支配された青年にとって現実には夢のようなものであると同時に、他方、それを思い出す後年の語り手にとっても、夢のようなものだからである。青年 David は恋愛の力に圧倒された。そこには Miss Lavinia が暗示した “mature affection is modest and retiring” (597) という真実の恋愛の姿はない。しかし、語り手は、過去の自分が、うつつの中で見た夢を、否定することはできないのである。それは、幼少期の無知を愚劣だといって批判できないことと同じである。本当の愛情は、 “it lies in ambush, waits and waits” (597) という言葉のまま

に、さまざまな試練を経て、達することのできるものであり、Davidにとってそれは、Agnesへの愛情であったことは、周知の通りである。

David Cecilは*David Copperfield*について、最初の160ページは、英語で書かれたものの中で最良のものだということを言っている⁽⁹⁾。160ページという具体的な数字がどこから出てきたか Cecilは説明していないが、Oxford Illustrated Dickens版では、それは第十一章のなかばまでに相当する。つまりMurdstone-Grinby商会へ奉公に出されたDavidが、Mr. Micawberと初めて出会う場面である。この前半の場面は、なんとはなしによく引き合いに出される。それはなぜであろうか。

実は、この第十一章の少しあと、第十三章において、商会を抜け出したDavidは、はるか昔、彼の誕生の日にRookery邸へ訪ねて来たのを限りに姿を消していた叔母Betsey Trotwoodをたよって苦勞の末、Doverの彼女の家へたどりつくのであるが、この叔母の力を得て法律を学び始めるDavidの以後の経歴は、それ以前とは大きく変わって来る。まず、Betsey Trotwoodは、Davidの唯一の親族として活躍し始めるし、さらには彼女を後見として、Wickfieldの宅に寄宿したことでAgnesやHeepやStrong夫妻等々、新しい人物たちと次々に会って行く。これらの人物たちは、Davidの周囲で、それぞれ生彩のある役を演じ、小説の後半のプロットを形作る重要な人物たちである。この長編小説は、成人したDavid自身の口ですべてが語られているわけであるから、あらゆる登場人物たちは、Davidとの関係の中で、Davidの心に映ったままの形で描かれているのである。それにもかかわらず、読者の興味は、次第にDavid自身の身の上から周囲の人物の身の上へ分散する傾向になって行く。例えばSteerforthとEmilyの一件、Strong夫妻をめぐる騒動等は、サブ・プロットと考えてよく、彼らがそれぞれの不幸の中で演じて見せる人生の相は、David自身の経歴(例えば、Doraとの結婚等)と同じくらいに興味深い。

以上のことを考慮すれば、Cecilが最初の160ページとしたのは、語り手(すなわち成人した現在のDavid自身)が、自分の生い立ちに話題を集中して、きわめて緊密な語りの進行を成している部分を指すと考えられよう。そしてほとんどの読者は、もしDavid自身に愛着を感じるとすれば、この部分から最も強い感銘を受けるに違いない。たしかにMr. MicawberもBarkisもHeepも人物として良く彩られている。しかしDavid自身が自分の幼少期少年期を描く時、その鮮かさは独特の純粋性を身につけている。他の部分(そして他の小説)では成就されていないある種の美的創造が、散文の極致と言えるような見事な言語的叙述によって成しとげられているのである。

本論で詳しく述べたように、——そして論議のほとんどは問題の前半部分に集中したわけであるが——幼い心が、現実の冷酷な仕打ちに合っておののいたり、愚かしい心が、現実の姿を誤って判断し、奇妙な空想を生んだりする有様は、成熟した大人の透徹した洞察によって照らし出される。今は大人となったDavidの目はしかし、美しいほどに優しい。彼の目は、すべてを恕す。それは、人が自分の過去を眺める時に、自然うながされる態度であり、*David Copperfield*の幼年期少年期を描く散文は、その態度を確固たるものとした芸術的結晶だと言えるであろう。

註

- (1) George Orwell, 'Charles Dickens' in *Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell*, Vol. 2 (Harmondsworth: Penguin, 1984), p. 465.
- (2) *David Copperfield* からの引用はすべて The Oxford Illustrated Dickens (London: Oxford U. P., 1982) の版による。但し、引用符を「」から“”に変更した。本書からの引用文の最後につけられた数字はページを指す。
- (3) この点について Randolph Quirk は言語学的な立場から分析している。'Charles Dickens, Linguist'

in *The Linguist and the English Language* (London: Edward Arnold, 1974) pp. 24-5.

(4) 母親の、女としてのたよりなさ、愚かさは、「なんて馬鹿な恥知らずの人たちでしょう」と語りながらも、笑って顔を手でおおう動作の中に、歴然とかがわれる。しかも、「このことをペゴティに言うてはいけない」と子供に言い含める様子は、彼女の再婚後の不幸が、本質的には彼女の弱さから来ていることをほのめかしているように思われる。(一面的・表面的と言われる Dickens の性格描写——それにもかかわらずちらりとかいま見られる人間性の深み)。

(5) Fanciful as if については G.L. Brook, *The Language of Dickens* (London: Andre Deutsch, 1970), p. 33; J. Hillis Miller, *Charles Dickens: The World of His Novels* (Cambridge: Mass., 1973), p. 152. を見よ。

(6) 同じような例は David が Salem の学校へ赴く途中で、Mr. Barkis に “No sweethearts, I b’lieve?” と Miss Peggotty の件でさぐりを入れられた時、David が “Sweetmeats did you say?” と聞き返すところにも見出せる (64)。母親に再婚の相手ができたことが少年の心に理解し難かったことと同様に、ここでも大人の恋について、はっきりとした知識もイメージも持たない David が sweethearts という言葉に出会った時のとまどいが、面白く描かれている。少年の不十分なイメージに “no person walks with her” と助け舟を出す Barkis も面白い。

(7) さらに面白いことは、P. 87において、David を受け入れた Salem の学校の生徒たちの代表者である Steerforth が “I’ll take care of you” という言葉を David に向けて言っていることである。なんといっても、無情な社会で、David を守ってくれる人物が表われたということは好ましいことであり、Take care of というフレーズが、「面倒を見る」という意味で使われていることは、以前「気をつける」という意味で使われていたことと対照的で面白い。

(8) 法律家の冗語法に対する批判という観点からは、Stephen Ullman, *Semantics: an Introduction to the Science of Meaning* (Oxford: Basil Blackwell, 1983), p. 159で述べていることが参考になる。法律家の文体の冗長性を慣習的な特徴としてとらえるのは英語学者の意見である。しかし同じ英語学者でも、Dickens を linguist としてとらえた Quirk 教授は、この小説家を、言語的様相から人間的洞察を得ることのできるまれな文学者として見ている。Quirk 教授はそういう意味での文学作品の語学的研究においてすぐれた示唆を与えてくれる。政治用語に関する Dickens の見解は、彼のさまざまな小説からの引用とともに、Quirk 教授の前掲書 (p. 27-29) に詳しい。

(9) David Cecil, *Early Victorian Novelists* (London: Constable & Co Ltd, 1980), p. 55.

(昭和61年9月17日受理)

(昭和61年12月27日発行)

